

# プリティ・プリンセス2～ロイヤル・ウェディング～

2004(平成16)年12月9日鑑賞(試写会・リサイタルホール)

★★★



監督＝ゲーリー・マーシャル／出演＝アン・ハサウェイ／ジュリー・アンドリュース／クリス・パイン／カラム・ブルー／キャサリン・マーシャル／ジョン・リス＝デイヴィス（ブエナ・ビスタ・インターナショナル〈ジャパン〉 配給／2004年アメリカ映画／113分）

……「プリティシリーズ」最新作は、王家の跡目争い(?)を優雅かつユーモアたっぷりに描くプリンセス物語のパート2。シンデレラ・ヒロインのアン・ハサウェイについて、監督は、「ジュリア・ロバーツ、オードリー・ヘップバーンそしてジュディ・ガーランドの良いとこどり」と絶賛しているが、さてあなたは……？ もともと女性客目当てのおとぎ話(?)は、男には少し退屈だが、70歳のジュリー・アンドリュースの歌声にはビックリ……！

## 「プリティシリーズ」とは知らなかった！

この『プリティ・プリンセス2～ロイヤル・ウェディング～』は、「プリティシリーズ最新作」とのこと。つまり、ゲーリー・マーシャル監督が1990年にジュリア・ロバーツを起用してつくった『プリティ・ウーマン』以降の、『プリティ・プライド』（99年）や『プリティ・プリンセス』（01年）は、「プリティシリーズ」と称されていたわけだ。前作『プリティ・プリンセス』は、かつて私が大好きだった『サウンド・オブ・ミュージック』（65年）のジュリー・アンドリュースが出演していると聞いて観たかった作品だが、残念ながら見逃していたため、今回は是非にと思ったが……。

## 主演女優は？

主演女優は、前作『プリティ・プリンセス』で抜擢されたアン・ハサウェイ。彼女について、ゲーリー・マーシャル監督は、「ジュリア・ロバーツ、オードリ

ー・ヘップバーン、そしてジュディ・ガーランドの良いとこどりが、彼女なんだ」と手放しで絶賛しているとのことだが、私にはどうも、そこまでは考えられない。たしかに、ところどころでは「これは美人！」と思うシーンはあるものの、一見して強く印象に残り、心を虜にってしまうオードリー・ヘップバーンのような魅力を備えているとは、残念ながらとても思えない。前述の表現は少し買いかぶりすぎでは……？

もっとも彼女は1982年生まれだから、まだ22歳の、これからいくらでも成長していくはずの女優。むしろ、これから演技力と美貌に磨きがかかることを楽しみとしておこう。

### これは所詮女性のおとぎ話

前作の『プリティ・プリンセス』は、一介の高校生であった女の子ミアが、突然王位継承者だと言われ、とまどいながらもジェノヴィア国のプリンセスとして生きていくことを宣言するという、女の子の夢物語だったらしい。

そして今回のパート2は、王位を継承しようとする主人公ミアに、対抗馬ニコラス（クリス・パイン）が登場し、王位継承をめぐる闘争が展開されるというもの。しかしそれを生々しく描いたのでは女性に支持される映画とはならないため、その「政権闘争」もコメディタッチで、あくまで観客の夢を奪わないように描かれている。したがって、「骨太ドラマ」大好き人間の私には、このような、最初から女性客をターゲットにしてつくった映画はあまり向かないことがよくわかった。この作品は、良くも悪くもプリンセスを夢見る女性客をターゲットにした、女性のおとぎ話なのだ。

### 40年ぶり？に見たジュリー・アンドリュース

私は高校1年生の頃、『サウンド・オブ・ミュージック』を観て大感激し、合計7回映画館に観に行った。しかも、今から考えれば完全に違法だが、この映画に感動した数人の仲間たちとともに、映画館の中でカメラ撮影をし、そのネガを自分たちで現像して引き伸ばし、アルバムを作って楽しんだことをよく覚えている。この映画で歌われた『ドレミの歌』は誰でも知っているものだが、それ以外

にも、『サウンド・オブ・ミュージック』『エーデルワイス』『もうすぐ17歳』『あの山に登れ』などのナンバーは大好きで、今でも英語の歌詞を覚えており、歌うことができるもの。

映画『マイ・フェア・レディ』（64年）の主役をオードリー・ヘップバーンに奪われたのはジュリー・アンドリュースにとって大変なショックだったはずだが、あの映画はやはりヘップバーンの女優としての魅力があったから大成功したと私は思っている。歌がうまいだけではやはり映画の成功はムリ。ジュリー・アンドリュースは、『メリー・ポピンズ』（64年）では、歌のうまさとコミカルな味によって最高の魅力を発揮していたが、その後出演した『ハワイ』（66年）、『引き裂かれたカーテン』（66年）などでの女優としての魅力はもう一つと言わざるをえなかった。

私のジュリー・アンドリュースの歌への興味はLPレコードにも及び、彼女の『マイ・ネーム・イズ・ジュリー』というLPでの『アレキサンダーズ・ラグタイム・バンド』などは私の大好きな曲。とにかく、歌のうまさにおいては超一流中の超一流。

そして彼女について特筆すべきことは、その英語の発音の美しさ。詳しくは解説できないものの、とにかくその発音の美しさは私が聞いてもわかるほど、群を抜いたものだ。

このジュリー・アンドリュースが前作の『プリティ・プリンセス』に女王役として登場し、王位継承者のミアを教育していくという重要な役割を演じているとのことだったので、今回はこれを楽しみに観たが、そりゃ立派なもの。すでに70歳になる彼女が、女王として振る舞い、見事な歌を聴かせ、さらに最後には愛する人と結ばれる、という何ともおいしい(?)役を演じている。すでにオードリー・ヘップバーン亡き今、やはり、長生きして生涯現役で働けることが一番の幸せと私なりに納得したものだ。

## この映画での法律論は？

この映画のストーリー展開の要となる法律上の論点は、ジェノヴィア国には、女性が王位に就くには結婚しなければならないという法律があるということ。ホ

ントにそんな法律があるのかどうか知らないが、もしそんな法律があるとすれば、それはおかしいもの。ましてやそんな「論点」が、突然プリンセス・ミアの対抗馬であるニコラス（＝デヴロー卿）を推すメイブリー子爵の口から出てくるのもおかしい話。したがって、これはこの映画製作のために設定された論点にすぎないと私は思っている。理論的にどう考えても、そんな法律はおかしいはずだ。

また、真面目に考えても仕方がないのかもしれないが、このジェノヴィア国の国会議員たちは、いったいどんな仕事をしているのかと叱責したくなる。彼らは国会でもろくな仕事もしていないうえ、ロイヤル・ウェディングの場を突然国会の議場に変えて、前記の法律を変えてしまったりするわけだ。こんな馬鹿なことが行われたのでは国家が成り立つはずもないが、これは所詮女性向けの夢物語と割り切って楽しまなければ……。

### 思わず日本の皇室と対比……

日本ではおめでたいことに、つい先日天皇、皇后両陛下の長女紀宮さまの婚約が報じられたが、他方、皇太子妃雅子さまの病氣療養という暗いニュースが続いている。さらに、皇太子殿下による雅子さまの「人格否定」発言に対し、弟の秋篠宮さまから異論の声が聞かれるなど、皇室の中には何となく不協和音（？）が出ている感じ……？ さらに、2005年にはわが国は戦後60年を迎え、いよいよ憲法改正問題が現実的な政治テーマになりつつあるが、これと並行して女帝の可否問題が少しずつクローズアップされてきている。こんな現実問題を少しでも真剣に考えるために、この映画のような「プリンセスもの（？）」が刺激を与えることになれば、それはそれでいいことかも……？

2004(平成16)年12月11日記